

2019「植村直己冒険賞」授賞式の開催 ～世界的冒険家の精神を継承～

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため延期していた、2019「植村直己冒険賞」の授賞式を開催する。

《植村直己冒険賞》

本市出身で世界的な冒険家の植村直己さんの精神を継承し、周到に用意された計画に基づき、不撓不屈の精神によって未知の世界を切り拓くとともに、人々に夢と希望そして勇気を与えてくれた創造的な行動(業績)について表彰する。

1 日時

2020年7月25日(土) 午後1時30分～(開場:午後0時30分)

2 場所

日高文化体育館(日高町祢布 954-6)

3 受賞者

岩本光弘さん

※ 受賞者の概要は2月12日の記者会見でお知らせ済み。

※ 冒険概要は、別紙「2019 植村直己冒険賞受賞者」のとおり。

《プロフィール》

岩本光弘(いわもと みつひろ)

1966年12月27日、熊本県天草市生まれ。指鍼術師。13歳で残存視力を失い始め、16歳で全盲となる。1988年3月熊本県盲学校専攻科理療科卒。1989年、23歳の時に広い世界を見たいと、奨学金を得て San Francisco State University に留学(～1991年)。1992年、26歳の時に筑波大学付属盲学校で教員として勤務する傍ら、青山学院大学で心理学を学ぶ(～2006年)。2002年、自宅近所の千葉県稲毛マリーナのレンタルヨットの存在を知り、中高時代ヨットをしていた妻に誘われて初セーリングをする。2006年、米カリフォルニア州サンディエゴに移住。著書「見えなからこそ見えた光」(ユサブル)。売り上げの一部は国際視覚障害者援護協会に寄付する。



写真提供:ダグラス・スミス氏

4 式典の概要

(1) 授賞式

ア あいさつ

豊岡市長

イ 冒険賞の授与

メダル、楯および副賞(100万円)

ウ 選考評

選考委員(国立民族博物館名誉教授)石毛直道

(2) 受賞記念講演会

演題 「夢に向かって一歩踏み出せ ～二度の太平洋横断から得たもの～」

5 実施方針

- (1) 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、①来場者のマスク着用、②手指消毒の徹底、③席の間隔を十分に確保する。
- (2) 主催者関係、来賓、賞関係者は必要最小限にとどめ、観覧者は200人程度とする(施設定員は600人)。
- (3) 冒険賞の意義、受賞者のチャレンジ精神を紹介する構成とし、市内の学校(特別支援学校を含む)関係者、およびコミュニティ組織の関係者に案内する。
- (4) 例年行っている日高東・日高西中学校の生徒の観覧は行わない。授業時間の確保を優先する。
- (5) 当日の様子を映像にまとめ、学校や地域団体に提供する。

〔問合せ〕 豊岡市地域コミュニティ振興部生涯学習課 TEL 0796-23-0341

事業内容については

豊岡市立植村直己冒険館 TEL0796-44-1515

2019 植村直己冒険賞受賞者

分 類 : 海		冒険状況 : 完了	個人・団体 : 個人
受 賞 者	氏 名	岩本 光弘 (いわもと みつひろ)	
	性 別	男	
	年 齢	53歳 1966年(昭和41年)12月生まれ	
	住 所	アメリカ合衆国 カリフォルニア州サンディエゴ	
実施の概要		冒 険 名	全盲のハンディキャップを抱えながらも太平洋横断
		実施期間	2019年2月25日～2019年4月20日 ※日本時間
趣 旨	初めは見えないことに気づかないくらいの軽度な先天性弱視であったが、高校生の時に全盲となる。旧筑波大付属盲学校の鍼灸の教員になり、英会話教室で知り合ったアメリカ人女性と結婚。セーリング経験があった妻の誘いで35歳の時にヨットを始める。		
	設備の位置を覚えると、ヨットの上で動くことができ、頬で風向きを感じ、舵も取れた。2006年、アメリカ・サンディエゴに移住。やがて「太平洋を横断したい」との思いが芽生える。腕前も世界大会に出場できるまでに上達していた。2011年、太平洋横断を支援するという雑誌の企画に応募。健常者とペアを組み、2013年6月に福島県を出港したが、6日目にクジラに衝突してヨットが浸水。船体放棄後、膨張式救命いかだに乗り込み、10時間漂流後救助された。		
	「僕さえ夢を持たなければ・・・」。申し訳なさ恐怖心で海に近づけなくなったが、「ネバーギブアップ」と言い続けてきたことが嘘になる、と再び海へ。知人の紹介で知り合ったアメリカ人男性ダグラス・スミス氏からペアの申し出があり、再挑戦する決心をした。ダグラス氏はアクティビティなライフスタイルを好んだ生活をしているが、ヨットは完全な初心者のため岩本氏を支えるために訓練を重ねた。		
		東日本大震災の時に、自分にできることは何かを考え、太平洋横断のゴールを福島に決めた。全盲セーラーとヨット初心者がアメリカ・サンディエゴから福島県への航海に挑んだ。	
冒 険 内 容		2019年2月25日、太平洋横断に向けてアメリカ・サンディエゴを出港。航海は思っていた以上に苦戦。日本近海に入ってから、前線や低気圧に10回以上遭遇し、風速が軽く40Kt(ノット)を超えることもあった。台風並みの低気圧を避けるために100マイル以上も逆戻りしたこともあり、精神的に追い込まれる日々が続いた。4月20日、福島県小名浜港いわきサンマリーナに到着。60日を想定していた航海日数は、54日3時間4分、航海距離は13,000Kmとなった。晴眼者(目の見える人)が風の向きなど状況を伝えながら、全盲の人がヨットの舵と帆を操る「ブラインドセーリング」での無寄港太平洋横断は世界初の快挙。	
工夫・独創性		2013年のリベンジとなる航海。数々の挫折や失意の日々を乗り越えてきたからこそ感じる思いもある。震災で海に対して恐怖を抱いてしまった福島の子どもたちに海の優しさ、素晴らしさを伝えたくて、前回は福島から出航。クジラとの衝突が原因で、船を沈めてしまうことになり、やっぱり海は怖いものだと思え付けてしまった。今回いわきに無事につくことができ、子どもたちに、やりたいと思えばやれるんだ、海は素晴らしい、と感じてもらえきっかけになれば、と考えている。	